

**Policy Topics**

## パレスチナ人一人ひとりの 生から見た中東問題<sup>1</sup> Middle East Issue in the Light of Palestinians' Life

役重 善洋<sup>2</sup>

Yoshihiro Yakushige

### ムハンマド青年～被占領地のパレスチナ人

ムハンマド青年に出会ったのは、2000年12月、私が初めてパレスチナを訪ねたときのことである。第二次インテッファダ(反イスラエル民衆蜂起)が始まって3ヶ月が過ぎようとしていたときだった。ガザ地区南部の町ハンユニスを訪ねたとき、当時大学生だった彼は、慣れない様子で通りを歩く私達日本人グループを見て、流暢な英語で声をかけてきた。つい1ヶ月前にイスラエル軍によって殺害された従兄弟の家族を訪ね、ぜひ話を聞いて欲しいのだと言う。彼に連れられて訪ねた家では、犠牲者の両親を含めた遺族が総出で私達を迎え入れてくれ、ムハンマド君の従兄弟が殺害された状況を語ってくれた。

ガザ地区南部の地中海沿いにはユダヤ人入植地が作られており、その周囲にはイスラエル軍の検問所が設置されている。これらの検問所は、パレスチナ人の移動を厳しく制限しており、占領政策の象徴的存在と

なっていた。それゆえに、しばしばパレスチナ人達は抵抗の意思表示として検問所のイスラエル軍に対して投石行為を行ってきた。当時14歳だったムハンマド君の従兄弟もそうしたパレスチナ人の一人だった。彼が殺される前日、やはり同じ検問所でイスラエル軍に撃たれて重傷を負っていた彼の級友が病院で死んだ。彼はこの級友の「葬送デモ」に参加した後、「復讐」のために検問所に向かい、そこでイスラエル兵による一発の銃弾によって心臓を打ち抜かれて殺された。

後になって知ったことだが、この検問所は第二次インテッファダにおいて最も多くのパレスチナ人犠牲者を生んでいる場所の一つであり、このとき聞いたエピソードも決して特殊なものではなく、むしろ典型的なケースだったようだ。

帰国後もムハンマド青年との交流はインターネットを通じて続いた。2002年の夏には、再度ガザを訪ね、彼に再会した。状況は明らかに悪化していた。検問所付近にあったパレスチナ人の家屋はすべてイスラエル軍によって破壊され、瓦礫の山と化していた。ユダヤ人入植地の周囲には「壁」が張り巡らされ、以前にも増して要塞のような圧迫感を周囲に与えていた。

私にとって最もショックだったのは、ムハンマド青年が大学を辞めてしまっていたことだ。すでに1年半前の段階で、道路封鎖のせいで大学に行けず、まともに授業を受けられないと漏らしていた。イスラエルで働いていた彼の父親もインテッファダが始まってからは失業しており、授業料を払い続けることも困難だったようだ。

2005年8月にはガザ地区のユダヤ人入植地が撤去され、地区内の検問所もなくなった。

<sup>1</sup> 本稿は、2008年1月9日(水)に行われた総合政策学部講演会における講演内容の概要を筆者自身がまとめたものである。講演時のテーマは、「パレスチナ問題とは何か?」であった。

<sup>2</sup> パレスチナの平和を考える会メンバー、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程

しかし、ガザ地区そのものは依然として封鎖され、外部との人・物の交通は厳しく制限されたままだ。人々の生活は厳しくなる一方で、現在、貧困率(一日2ドル以下の収入しかない住民の割合)が70%、失業率が60%という状況にある。その後、ムハンマド君は結婚し、英語学校の講師をするなどして、何とか糊口をしのいでいるようではあるが、今も安定した職を得ることができずにいる。

ライアックさん～イスラエルのパレスチナ人

2000年にパレスチナに行く前、語学留学のためにイギリスに行った。ライアックさんに出会ったのは、語学学校のすぐ隣にある大学である。彼はイスラエル人とパレスチナ人が共生を試みているワハト・アッサラムという村の住民で、村長を務めたこともあるという。当時、大学にはパレスチナ人留学生が少なくとも4人はいたが、パレスチナの状況について周囲に熱く語り、学内で支援の呼びかけを行うなど、最も目立っていたのがライアックさんだった。私がパレスチナを訪ねた際には、同時期に彼も帰省したため、村を案内してもらったり、被占領地のNGOを紹介してもらったりなど、全面的に協力してくれた。印象的だったのは、ワハト・アッサラム村と被占領地(西岸地区およびガザ地区)の状況の落差である。この村はテルアビブ空港の近く、つまり「イスラエル領内」にあったため、「紛争地」の気配は全くなく、少なくとも表面上は人々はごく通常の日常生活を送っているように思えた。それに対し、被占領地の状況はすでに述べた通りの状況で、老若男女を問わず全住民が何らかのかたちで抵抗運動に参加しているという熱気と悲壮感がいやがおう

にも伝わってきた。イスラエル兵を見かけることもないライアックさんの村の静かさと被占領地の状況との間のギャップは、イギリスでのライアックさんの際だった「アクティブさ」を見ていたこともあったため、なおさら腑に落ちない印象を私に残した。

イスラエル国内に暮らすパレスチナ人と被占領地に暮らすパレスチナ人との間にある大きな政治的立場の違いとそのことの当事者にとっての意味を私なりに理解したのは、私が日本に帰国した後、ライアックさんから送られてきた彼の修士論文「公正で持続的な平和にむけての提案」の次の箇所を読んだときだった。

私はパレスチナ人であり、それが意味することは、私の理解では、自分の民族—とりわけ50年以上、何世代にも渡って難民キャンプに住み続けている人々—をその苦難から助け出すために可能なあらゆる努力をしなければならないということである。キャンプの現実は私にとって、まさに、困惑させる、恥ずべき、痛々しいものであり続けている。

これを読んで、ようやく私はライアックさんがブラッドフォード大学に留学していたパレスチナ人のなかで一番活動的だったことの意味が分かったように思った。

イスラエル国内に住むパレスチナ人は、国内では二級市民の立場を強いられつつ、被占領地のパレスチナ人からはしばしば「裏切り者」のレッテルを貼られるという板挟みの位置に置かれている。ユダヤ人との「共生」を目指すワハト・アッサラム村の取り組みについても、被占領地のパレスチナ人のなかには「イスラエルの宣伝塔」だとして全く評価しない人もいた。一方、2007年にイスラエルの連立与党に参加した極右政党「イ

## Y. Yakushige, Middle East Issue in the Light of Palestinians' Life

スラエル我が家」のリーバerman党首は、イスラエルの人口の20%を占めるイスラエル国籍を持つパレスチナ人を「外敵よりも危険な存在」と言い放つ。ライアックさんが直面している困難には、ガザに暮らすムハンマド君の直面している問題と同根であると同時に、異なる質の深刻さが孕まれているように思われる。

## 抑圧と分断を乗り越える希望

日本では、メディアの影響もあり、パレスチナ人と言えば、紛争地で暮らす人々というイメージが大きいように思う。しかし、パレスチナ人全体の人口1010万人のうち、イスラエル軍の占領下にある西岸とガザのパレスチナ人口は380万人程度に過ぎず、120万人はライアックさんのようにイスラエル市民権を持ってイスラエル領内に暮らし、残りの510万人は離散パレスチナ人として周辺アラブ諸国の難民キャンプなど、世界各地に散らばっている。

イスラエルは、第一次中東戦争を含め、独立前後の軍事作戦において一貫して二つの目的を追求した。できるだけ多くの領土を得ることと、そこに住むパレスチナ人をできるだけ減らすこと、つまり追放することである。結果として、元々ユダヤ人はパレスチナ全体の7%しか土地を所有していなかったにも関わらず、イスラエルは西岸とガザを除く78%の土地を獲得し、そこに暮らしていたパレスチナ人の9割が難民として故郷を追われた。パレスチナの人々はこの故郷喪失の経験を「ナクバ」(破局)と呼ぶ。また、イスラエルの歴史家イラン・パペはこの出来事を典型的な民族浄化と位置づける。この「ナクバ」のときに、イスラエル軍の作戦ルートと住んでいた村の位置関係が

どうなっていたか、いつ、どこに避難したか、あるいは避難しなかったか、といった、歴史の偶然やわずかな判断の差が、その後の彼らの人生を大きく決定することになった。最悪の場合、デイル・ヤシーン村のような集団虐殺の犠牲となるケースもあった。

ムハンマド君とライアックさんを例に取れば、彼らはガザ地区とエルサレム近郊という、距離で言えば、100キロも離れていないところで暮らしているにも関わらず、互いに同胞として出会う可能性はほとんどない。その理由はと言えば、ムハンマド君の家族は60年前、戦火を逃れ、たまたまガザ地区に避難し、一方、ライアックさんの家族は、運良くイスラエル領内に留まることができたということに過ぎない。

世界の難民の4分の1がパレスチナ難民だと言われる。逆に言えば、戦争や民族浄化によって、故郷を奪われた人々が、パレスチナ難民以外に、その3倍もいるということである。国連によって難民として登録されていなくとも「難民状態」にある人々は、さらにその何倍もいるだろう。作家の除京植さんは、在日朝鮮人のことを「半難民」という言葉で表現したが、これに倣えばライアックさんのようなイスラエルに住むパレスチナ人も「半難民」ということが可能であろう。

世界を見渡せば、こうした、国家や民族の狭間で、本来あった生き方を奪われた人々、奪われる危険にさらされている人々は、実は決して特別な人々ではないことに気付かざるを得ない。そういう意味では、第二次大戦後、アメリカの核の傘のもとで、直接的に戦争に巻き込まれることのなかった日本に住む「日本人」こそが非常に特権的な位置を占める少数派だと言っても良いだろう。その日本でさえ、かつてないレベル

でアメリカの戦争に巻き込まれつつあり、また、格差社会の広がりの中で、安定した生活を保障されている層はますます薄くなりつつある。人間としての権利と尊厳を奪われながらも日々を生き抜くパレスチナ人達の姿は、現代世界に生きる全ての人々にとって、すでに他人事ではないのだと考えるべきであろう。彼らが生きる希望は、私達がいかに国家や民族のイデオロギーから自由な「共生社会」を構想する主体となり得るのかという希望でもある。